

思考、教養の伝統と現代

広瀬友久

人間は、人間として出発したときから、自然的秩序を逸脱した存在となったと言はれてゐる。また、その逸脱をもって、人間を定義することも行なはれてゐる。確かに人間以外の動物は、生れたときから、自然の中でどのやうに生きてゆくべきかがわかつてゐるのであり、自らの種の生存に最適の状態をつくり出してゆけるやう、初めから方向づけられてゐるのである。蜂は、数学者の計算も及ばないほど完璧な構造をもった巣を、意識的な計算といふ過程を経ずにつくってゆくことができる。しかるに人間は、生れたままの状態に於ては、そのやうな方向づけが全くなされてゐない生物である。といふことは、人間は、自らに意識的に方向づけを与へなければならないわけであり、実際、人間は、イメージの世界の中で、そのやうな操作をした後に行動に出ることになってゐるのである。この過程は、記号化といふことと不可分の形で進行する。記号によって、外界はより明確に分節化され、関係づけられて有意義化する。さらに記号の働きで、イメージ世界は自立して、より高度な操作も可能となつてゆくのである。

そしてさらに記号化によって、人間はイメージ世界を交換することもできるのである。この交換をくり返してゆけば、イメージの共有が生じ、人間集団の秩序が生れることになる。古代に於て人類は、神話を象徴体系とする様々な社会秩序を成立させた。しかし秩序といふものは、いったん成立してしまふと、内部の人々にその成立事情を忘れさせ、あたかも自然的に形成されてきたものであるかのやうに機能する。例へば古代オリエントに於ては、その秩序が混沌を克服して成立した人工的なものであるのを知るのは、年々の秩序更新の儀式に与る王と神官のみであつた。しかしその古代に於て、共同体秩序の構成員

の各々が、自分たちの生きてあるこの世界の秩序が、どのやうな根拠に基づいたものであるかを、自覺的に問題にするやうになった唯一の文明があった。古代ギリシャである。

ギリシャの幾何学の大部分は、オリエントに由来するといはれる。しかしそれを、自明な前提から出発して、論証といふ手続をふむといふ形で一つの体系にまで築き上げたのは、ギリシャ人であった。このことは、ギリシャに於て初めて、理念的領域に独自の存在性が与へられたことを意味する。同時にこのことは、宇宙から自然、さらには市民の生活の場であるポリスに到るまでが、ある秩序をもったものとして対象化され、それに対して原理的な解明が、つまりは普遍的に了解できる形での解明がほどこされることが可能になったことをも意味してゐる。そして、このやうな原理的解明を可能にする基となる知識、つまりは理念的な知識、中でも最も抽象的で普遍的な数学的知識が、ギリシャ人にとっての教養の中心となつたのであつた。そのやうな知識を基に、この世界についてただひたすらに知るために知ること、それこそが死すべき存在としての人間にとっての最高のあり方とされたのであり、そこにこそ本来的な自由があるとされたのであつた。無論このやうなギリシャ人は、自由であればこそ、その一方で、各々が人間存在の混沌と向き合はねばならなかつた。そしてそのことに対しては、悲劇といふ形式を与へ、演ずることの中に混沌を昇華したのであつた。

西欧文明はギリシャを受け継いだといはれるが、それは何よりも、原理的思考を中心にして文明形成を行なつてきたといふ点に於てであつた。キリスト教すらも、ギリシャの論理によつて教義化された。しかし、ギリシャ人があくまで理論的解明のみを、つまりこの世界をひたすら観ることを重視したのに対し、西欧は特にその近代に於て、理論的知識に実用性を結びつけたのである。知識が実験によつて証明されてゆくと、それは科学革命をひきおこし、さらにその知識がこの世界に働きかけるべく応用されると、それは技術となり、産業革命の下地となつていった。そして近代哲学は、自意識から出発する人間の認識能力と、認識対象の秩序との間の対応関係を、理性によつて保証し

た。理性は混沌を呑み込み、この世界を覆ひ尽すとまで思はれたのである。19世紀になると、科学技術は、哲学から自立してそれ独自の成果を着々と重ねてゆくこととなり、「客観的知識」への素朴な信仰に外ならない実証主義的な考へ方が、一般化するのである。

一方、近代はエリート支配の時代であった。その担い手が、貴族であれ、ブルジョワであれ、特に文化面に於ては、強固なアリストクラシーが今世紀に至るまで存在してゐた。そしてそこに於て、エリート、すなはち善き人間にふさはしい教養とされてゐたのが、古典古代に関する知識であった。そこではやはりギリシャ同様、実用性の無い知識が尊重されたが、その範囲は、理念的知識には限定されず、広く文学芸術作品の完成された形式美、さらには言語表現技術へと目が向けられたのであった。そしてそれと関係して、神話のもつ豊かな象徴性も、彼らにインスピレーションを与へ続けたのであった。

今世紀に入ると、産業化の進展は、社会に著しい流動性をもたらしアリストクラシーを崩壊させ、大衆を歴史の舞台に登場させた。それは、アリストクラシーを支へてきた善き人間の規準を侵食し、古典的教養理念を解体した。さらに社会の流動化は、普遍的理念といふものそのものに対する不信を、広くひきおこすことになるのである。一方、科学の発達と、その技術としての一般化は、精神面にも大きなインパクトを与へずにはおかなかつた。まず科学技術は、この世界からその象徴的意味を徹底的に剝奪してしまつた。あらゆる象徴体系は、その虚構性が白日の下に晒されることになつたのである。さらにそれは、理念的なものを単なる目的意識に従属させ、その独自の存在性を失はせてしまつた。理性は操作的手段にまで貶められてしまつたのであり、かつては普遍的とみられた理念も、相対的なものであり、やはり虚構でしかないことが見えてきてしまつたのである。

しかし科学技術は、象徴も理念も無根拠であり、虚構であることを暴露しておきながら、自らは、この世界に何らの意味づけをすることもできず、人間を根拠づけることもできないのである。かくして現代に於て私達は、科学技術による、しかも制度化された巨大な自然支配力をもちつつも、方向づけを失つた存在として混沌と向き合はねばな

らなくなったのである。この、高度に産業化された社会に於て現在世界中で共有されてゐる現実を前にして、およそ思考といふものに、どのやうな可能性が残されてゐるであらうか。

まず、私達は依然として、多くのことを自明として生活してゐる、といふことがある。しかし、混沌と向き合ったとき、その自明としてゐることの虚構性が、はっきりと見えてくることであらう。まずこの方向が徹底化されねばならない。およそ何かが成り立ってゐるとすれば、それは必ずある枠組に於てのことなのであり、その枠組が明らかにされるべきなのである。このことは、現在では特に、科学技術に対してなされねばならないが、科学技術もまた虚構でしかないことは、鋭敏な科学者が以前から気づいてゐたことであつた。しかし科学技術は、ある点、つまり人間の自然の利用にかかはるといふ点で、常に自然との対応関係をもつてゐるが故に、その力を目に見える形で示しやすい。そこから、自然科学の自然像が、自然の実体を示すものだといふ迷信が生れる。しかし、対応関係があるといふことは、実体を把握してゐることの保障にはならないのである。別の任意の対応関係の枠を設定すれば、別の姿が現はれるであらう。実体はそもそも無いのであり、あるのは人間の作った枠組、つまりは虚構なのである。

科学技術も虚構に過ぎないことを明確にすることは、別にその有効性を否定することではないし、またさうする必要もない。ただ、科学技術の虚構性が明らかになれば、私達は、これまで科学技術が時間空間のイメージに及ぼしてきた暴力的支配から、自由になることはできるであらう。そこから、時空が固有の豊かさをもつたコスモロジーを、再建することができるかもしれない。人類の全歴史が、豊かな象徴性を帯びて甦るかもしれない。しかし私達は、ここで簡単に一つの枠組の中に身をまかせることはいさまい。生きるためには何らかの枠組を作らねばならないが、その枠組に入り切つてしまふことは、生きるのを停止することである。もはや、神話も宗教もイデオロギーも科学も信ずるには足らない。私達が身を置くべき場所は、ある枠組を設定することが、同時にそれを解体することでもあるやうな場所である。それは、そこに身を置くこと自体が、離れ技であるやうな場所であ

る。そこそが、建設することが同時に解体することであったソクラテスの立ってゐた、いや寝てゐた場所なのである。

今日、高等教育の普及に伴ひ、専門的言語系への人間の組み込みが、急速に進んでゐる。人々は、その言語系を自明なものとして修得し、できる限り早くその専門世界に参入することを要求されてゐる。そのやうなとき、自分の学んでゐるものの自明性に疑問をもち、自分のこれから参入する世界の枠組を解明しやうとするきっかけを掴めば、そこから人は思考し、生きることが始まるであらう。今日、もし教養といふものが成り立つとすれば、それは、その、思考への、そして生きることへのきっかけを与へるものとして以外にはない。